

長島天文台について

磯部洋明

京都大学大学院総合生存学館 / 宇宙総合学研究ユニット



本資料は、宇宙少年団・岡山桃太郎分団の長島愛生園見学（2016年3月28日）に合わせて作成したものです。長島気象十五年報等の愛生園発行の資料と当時を知る方への聞き取りに基づいていますが、内容に問題があった場合の責任は筆者にあります。

1955年頃の長島愛生園（長島気象十五年報より）

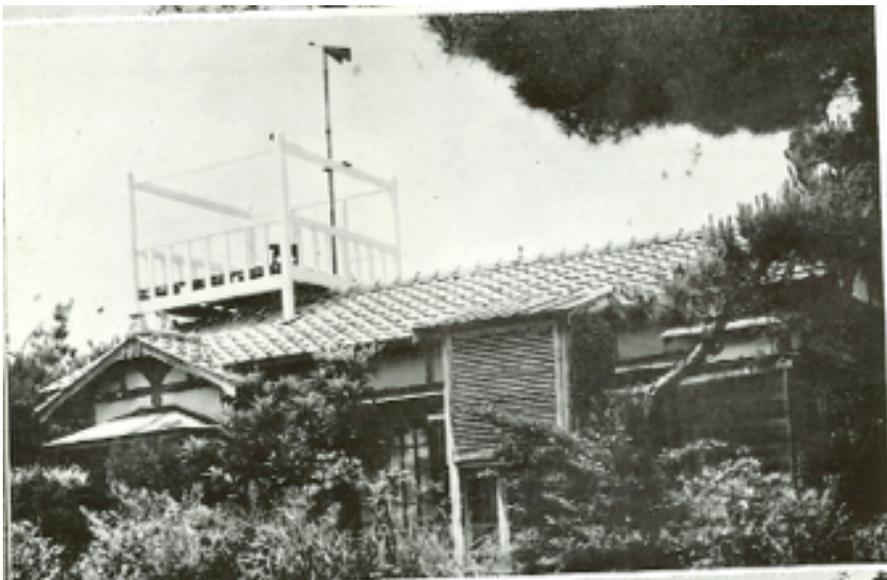




長島天文台と
気象観測所

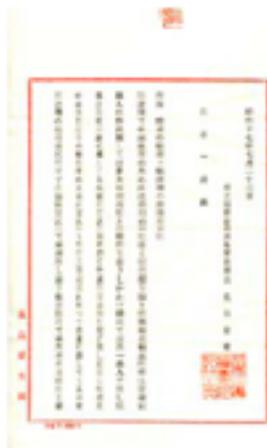


長島天文台
Nagashima astronomical
observatory.



長島気象観測所
Nagashima meteorological
observatory.

山本博士が1939年に
長島愛生園を訪問さ
れた時の写真

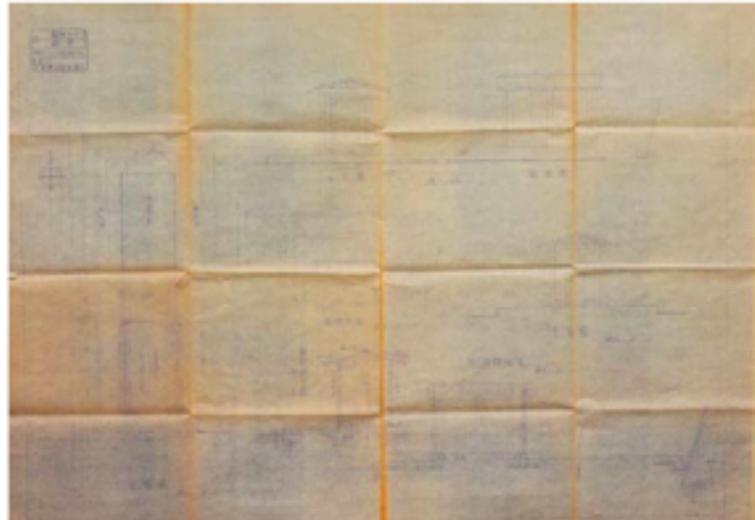
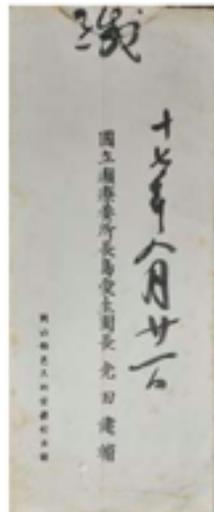
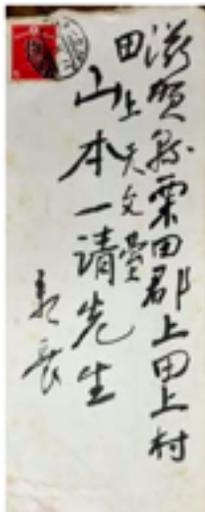


酷暑之候、高貴
答に厚押を蒙
り、御少祭園
天文台測所
移す事、幸に
至る事、此に
挨拶、石川、技
新、任、子、建、設、所
上、着、身、別、紙、を
呈、上、す、行、方、を
御、返、答、を、乞、ひ、申、上、す



光田園長からの来簡1、来簡2

愛生園天文台設計案（正面図）



光田園長から山本先生への手紙の封筒（来簡3）

愛生園天文台設計図面（改良版）

光田園長から山本博士への手紙 富田(2012)より

長島天文台のことを説明するには、天文台がその一部であった気象観測所の説明から始める必要があります。気象観測所は愛生園が出来てまもない昭和十年に設置され、気温、湿度、風向、降水などの気象観測が入所者の方々によって行われていました。気象観測所の設置にあたっては、岡山測候所から機材の貸与があった他、蔵重所長、原技師といった方々が園を訪れて観測の指導を行ったと記録があります。長島気象観測所の観測データは岡山測候所（今の地方気象台）に送られ、戦後ずっと後になってアメダスが設置されるまでは岡山測候所の正式な気象データとして使われていました。この業績のため、長島気象観測所は表彰も受けています。

気象観測を最初に行った病友は天野鉦太郎さん、その後をついで気象観測所の主任となり、長島気象観測所における気象観測の充実、そして天文観測の中心的な役割を果たしたのが、横内武男さんでした。横内氏は後に、「長島気象十五年報」をとりまとめた際に、「気象観測二十年の歩み」という文章を記していて、気象観測所の歴史はそれを読むとよく分かります。横内さんは、この文章のあとがきに気象観測に対する思いを以下のように書いています。

「この書を手にしにせらるる方々は、その諸表が単なる数字の羅列ではなく、その一つ一つに観測者の命が刻み込まれていることを知って頂きたいのであります。そしてこの資料を、あらゆる方面に利用し、活用して頂きたいのであります。この書が、いささかでも世に益することがあれば私達の病める命を活かし得たことになるのです。」

長島天文台の建設

長島天文台の建設には二人の天文学者が深く関わっています。一人は、京都大学花山天文台の山本一清・初代台長、もう一人は彗星や新星を多く発見したことで知られ、倉敷天文台で活躍された本田実さんです。天文学の普及とアマチュア天文家の育成に努めていた山本先生は、昭和14年12月に愛生園を訪問して天文に関する講演を行っており、昭和16年11月29日にはニュートン式五吋反射望遠鏡を持参して同望遠鏡の説明及び天文に関する講演をしたことが、「長島気象十五年報」の長島気象観測所年譜に記録されています。この時の訪問をきっかけとして、山本先生が寄贈した五吋反射望遠鏡を、倉敷天文台で使われていたのと同じように屋根を両側に開閉するスライディングルーフ式の観測小屋に設置した天文台が設置されました。天文台建設に関する園とのやりとりは昭和17年頃から始まっていますが、戦中戦後の混乱をはさんで、天文台が竣工したのは昭和24年6月のことです。竣工式には倉敷天文台から本田氏が列席した記録があります。

完成後は、太陽黒点の観測を行い、その結果は東京天文台（今の国立天文台）や、山本先生が京大退官後に設立された田上天文台（山本天文台）へも送られていたようです。山本先生が遺された資料の中からは、長島天文台から送られてきた黒点観測の記録がいくつも発見されています。また、星の掩蔽（えんぺい）観測を行ったり、観測所員以外の入園者に向けた観望会なども開いていたようです。残念ながら天文台の観測は昭和30年台後半には終わっていたようで、望遠鏡は英国のカルバー製のレンズを用いた貴重なものだったのですが、その行方は分かっていません。

山本先生への手紙

天文台建設の話が持ち上がった昭和17年、後に気象観測所主任となる横内さんが山本先生に送った手紙が、今も京都大学に保管されています。以下はその抜粋です。

「私は兼てより星座や天文に興味を持ち、先般先生が御寄贈下さった望遠鏡が設置せられたら、是非その方の係りにさせて戴こうと思っておりました。そして自来、夜空の星座を仰いだり、天文書を読んでひそかにその日の準備を致しておりました。（中略）私は昭和六年高工機械化卒業後東京目黒の海軍技術研究所に奉職致し、光学兵器研究室で山田幸五郎先生の下で、レンズの設計をしばらくやったことがあります。その頃より望遠鏡に非常な魅力を感じそれを通して観る星空に大きなあこがれを抱いて来ました。しかし今日までその希望を叶える機会もなく打過ました。愛生学園にいた時は（注：依田氏は園内の学校の教師も勤めていたようである）毎年夏期講習として、星座や星の話をプリントしては児童達と一緒に星の世界

を眺めて楽しく宵を過ごしたこともあります。(中略)今後私はこの島に一章を終わる運命にあり、生をかけてこのことをやりたい念願です。」

科学に関心の高かった横内さんは、ハンセン病の神経痛と気象の関係について研究して、その成果を愛生園の伊東正保医師との共同発表として、昭和28年に瀬戸内の研究会で発表しています。この時の記録は、後に伊藤医師が「らい患者の神経痛と気象との関係に関する横内武男君の業績の紹介」というタイトルで短い論文を書いています。歌人としても活躍した横内さんは「依田照彦」の名で多くの短歌を発表しており、また上に書いた山本先生への手紙も「依田照彦」の名で出していますが、気象(天文)観測に関する記録に関しては、本名である横内武男を使っていました*。その心は想像するしかありませんが、自分がこの世界に生きていた一つの証のように捉えられていたのかもしれない。

入所者にとっての長島天文台

天文台は園内の入園者同士のカップルの間で人気のデートスポットだったそうです。その理由には星を見てロマンチックなムードに浸れるということでしたが、それより何より、当番の観測員さえちょっと気をきかせてくれればカップルが二人きりになれる貴重な場所だったからだそうです。当時を知る元観測所員の方は、「星を見るのも楽しかったけどなあ、小型の望遠鏡で看護婦さんの寮を覗くのがもっと楽しかったなあ」と教えて下さいました。天文観測、あるいはもっと一般的に、自然科学の営みが、人々の生にとって何を意味するのかを、長島天文台のエピソードは考えさせてくれます。

最後に、横内武男さん(依田照彦さん)の歌集の中から、天文観測に関する歌を紹介します。

あきらめていてみし眼にかすかに木星の衛星がみゆると一つ二つ三つ四つ

*故人である依田さんの本名(横内さん)を記すにあたっては、依田さんを直接知る愛生園の現自治会長に相談し、了承を頂いています。

参考文献

長島気象十五年報 国立療養所長島愛生園 1955

富田良雄「山本天文台モノ資料紹介」第3回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録(2012):28-88, <http://hdl.handle.net/2433/164304> (京都大学レポジトリ)

伊藤正保「らい患者の神経痛と気象の関係に関する横内武男君の業績の紹介」長島紀要, 11, 46-49, 1963

依田照彦歌集, 長島短歌会, 1972